

六甲山系の中央部に位置する再度山^{ふたたびさん}は、神戸の市街地から北に3kmほどの距離にあります。その南斜面は宇治川^{うじがわ}となってJR神戸駅の東を流れ、北斜面は生田川^{いんたがわ}となり新幹線の新神戸駅の真下を流れています。また、北側には修法ヶ原池^{しゆはがはらいけ}や外国人墓地があり、神戸市が再度公園として管理し多くの市民が訪れる憩いの場となっています(写真1)。

六甲山系はほとんどがはげ山だったと言われています。明治14年に植物学者の牧野富太郎が高知から船で上京する時、神戸港から見た六甲山の様子を「六甲山の禿山を見てびっくりした、はじめは雪が積もっているのかと思った。」と書き残しています。再度山の北側は、多くの村々の共有地であつたことで、特に荒廃が著しかったようです。明治35年9月にイギリス人の旅行者リチャード・ゴードン・スミス(注:スミスネズミの発見者)が再度山の北側を撮影した写真が残っており、再度公園にある風楽山荘に展示されています。写真から当時の激しい荒廃状況が確認できます。

神戸市では、神戸港開港以降、人口の急増やコレラの流行などにより、上水道整備の必要にせまられます。明治30年、水道施設として生田川中流域に五本松堰堤^{えんてい}の工事が始まります。その一方で、上流域である再度山



写真1 修法ヶ原池と再度山

日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第28回

ふたたびさん
再度山の植林とその関連資料

兵庫県森林組合連合会(元兵庫県六甲治山事務所長) やまだ ゆうじ
山田 裕司



写真2 兵庫県の砂防工事の状況(明治36年)
神戸市森林整備事務所提供



写真3 ガラス原板



写真4 造林台帳、表紙(右)と抜粋(左)
神戸市森林整備事務所提供



写真5 石積みや積苗工、苗木の詳細が確認できる



写真6 現地に残る石積み

周辺の水源地対策は大きな課題でした。そこで、神戸市は東京帝国大学の本多静六博士の指導を仰ぎます。本多は、明治32年に神戸を訪れ、現地視察とともに森林の水源かん養機能の重要性について講演します。さらに、明治35年に外国人招聘教授であるドイツ人のヘーフェルとともに再び現地を視察し、植林工事の指導を行います。この時、本多は、工事の状況を写真で残しておくように助言したと、後日神戸市内で行った講演会で述べています。この本多の助言で撮影されたものが写真2で、そのガラス原板(写真3)が、今回の林業遺産に登録されました。

1万本、山檜(ヒメヤシャブシ)1万本を植栽します。なお、先ほど紹介したスミスが撮影した1枚の写真の中に、筋状の積苗工と思われる工事跡が写っており、撮影時期から、この時の工事の施工箇所が写りこんだと思われます。

神戸市では、この試験植林の実効性を確認し、明治35年11月から、本格的な植林工事が始まります。35年度は試験植林に隣接する再度山の北側で工事を実施し、翌36年度からは、南側を中心に574町で実施します。この植林工事の内容は、神戸市森林整備事務所に保管されている造林台帳(写真4)で植栽樹種等を確認することができます。初年度は松、扁柏(ヒノキ)、山檜を植栽していますが、翌36年度には多様な広葉樹を植栽しています。楠、杉、榲桲、欏、楓、コブシ、ポプラ等。これらは、本多の意見が反映

されていると思われます。ただし、後年、補植も多く行われており、明治41年度からは補植樹種のほとんどが松になっていることから、多様な広葉樹植栽の成績はあまり良くなかったのではと推察しています。

明治36年度から兵庫県による砂防工事が始まり、昭和5年ごろまで行われました。施工箇所は、特に荒廃の激しかった再度山の北側から実施されました。明治39年度から昭和5年度までは、県庁砂防課に残る砂防工事台帳で工事内容が確認できます。

ガラス原板は5枚存在し、神戸市森林整備事務所に保管されています。5枚のうち3枚は、試験植林の斜面をほぼ定点から撮影されており、成林していく経年変化(1年後、5年後、10年後)を確認することができます。ガラス原板は解像度が高いため拡大することで多くのことがわかります。積苗工の下段に石積みが1段詰まれている状況や、植栽のマツが3年生程度であることがわかります(写真5)。また、石積みの積み方や石の大きさも確認でき、写っている石積みが現地に現存することもわかっています。

兵庫県六甲治山事務所では、毎年、一般市民を対象に、再度山の植林の歴史や現存する石積み(写真6)、周辺の治山施設などを紹介するツアーを開催しています。こういったイベントなどをとおして、再度山の林業遺産を多くの市民に知っていただき、現在の緑豊かな再度山や六甲山が、先人たちの多くの努力によりはげ山からよみがえった森林であることをPRしていければと願っています。

参考文献
大日本山林会報287号(1906)